

マイナス金利後の邦銀の利鞘 —低下の元凶は本当にマイナス金利なのか？—

大槻 奈那

目 次

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. ユーロ圏との比較 |
| 2. 邦銀の低収益をめぐるこれまでの議論 | 5. まとめ—銀行の進むべき道 |
| 3. 邦銀の預貸金利鞘の変動要因 | |

マイナス金利導入から4年がたち、市場の短期金利には落ち着きも見られる。にもかかわらず、銀行の貸出金利や預貸利鞘は低下が続いており、その背景は、マイナス金利導入の前とは若干様相が異なる。一方、ユーロ圏では、意外にも、マイナス金利導入後に預金金利低下のペースが貸出金利より大きくなっており、利益も大きく伸びている。本稿では、マイナス金利導入の前後で邦銀の利鞘にどのような変化があったのか、ユーロ圏との格差の背景にあるものは何かなどについて検討するとともに、今後も続くであろう厳しい環境下での銀行がとるべき施策について考えたい。

1. はじめに

新型コロナの影響で景気の急減速が懸念される。2020年4月の政策委員の20年度消費者物価指数見通しもマイナス圏に沈没し、21年度についても1%にも届かない水準となっている。更なる金融緩和をめぐる議論が活発化しそうだ。

そこで議論が分かれるのがマイナス金利深掘りの効果と副作用である。効果については、マイナス金利から半年強たった16年9月に日銀が発表

した「金融緩和の総括的な検証」で、貸出金利が低下していること、ならびにその他の量的質的金融緩和により、物価上昇率の下げ止まり、資産価格の上昇などが見られたとしている。

一方、副作用やその限界をめぐる議論も盛んだ。その中心は、「マイナス金利の深掘りは銀行の収益に致命的な打撃を与え、システムを弱体化する」というものだ（例えば、藤原 [2019]）。確かに、日本の銀行業界の利益は、マイナス金利導入直後の16年度に大幅に下落した（図表1）。



大槻 奈那（おおつき なな）

マネックス証券執行役員チーフアナリスト、名古屋商科大学大学院マネジメント研究科教授。東京大学文学部卒業。London Business SchoolでMBA取得。三井信託銀行（現・三井住友信託銀行）、S&P、UBS証券、メリルリンチ日本証券で銀行アナリスト業務に従事した後、2015年9月より名古屋商科大学大学院、16年1月よりマネックス証券。